

未来型医療創造卓越大学院プログラム

FMバックキャスト研修 気仙沼 レポート

Bグループ



授業前の知識

少子高齢化や医療者の都市部偏在という問題に関しては、全員がメディアで取り上げられているレベルでの事前知識を有していた。しかしながら地域医療を担う医療者と話をしたことがある学生はいなかった。

大瀬戸は医療従事者の経験があり基礎的な医療についての知識を有していたが、宮川と柳田は医療従事者の経験がなく、病院における実習も大学病院に続いて2回目であった。また、大瀬戸は宮城県出身なので震災を経験していたが、宮川と柳田は西日本出身のため震災についての知識は少なかった。

授業の目的

超高齢社会の医療を担う地域病院で、高齢社会の現状を観察し、課題発見および解決策の提案を目指す。

到達目標

地域病院の課題を発見し、解決策を提案する。

授業内容

- 1日目 オリエンテーション、病院とは（石田先生）、
地域医療講義（横田先生）、循環器講義（尾形先生）
- 2日目 院内見学（総務課、リニアック、薬剤部、検査部、病理部、放射線部、内視鏡、
リハビリ、救急外来、外科病棟）、在宅医療見学（本吉病院：斎藤先生）
- 3日目 震災学習（岩井崎伝承館）、WOC講義（小野寺先生）、感染管理室講義（星先生）、
地域医療連携講義（熊谷先生）、胃癌（平宇先生）
- 4日目 食道癌・透析講義（石田先生）、透析見学、麻酔導入手術見学、
呼吸器内科講義（滝田先生）
- 5日目 学生発表

研究や仕事などに活かせる点

- A 地域医療が逼迫していることを改めて実感し、地域医療における問題点をデータとして可視化することの必要性を感じた。医療者の疲弊に目が行きがちだが、患者側にも不利益が生じる可能性もあるので、その視点での研究を行いたいと思った。
- B Advance Care Planning (ACP) において、患者家族が代理意志決定を行う際に、どのように満足いくものにできるか考えさせられた。
- C 虚血再灌流障害が原因の1つとされている床ずれが、特に高齢患者さんに多いことを知った。そのため、私の研究テーマの1つである「虚血再灌流障害のメカニズム解明」に、より真摯に取り組みたいと思った。



地域医療講義の様子



本吉病院の正面玄関にて

影響を受けたこと

- A 地域医療として地元の人に寄り添う医療を提供する一方、2.5次救急まで対応せねばならないという状況に驚いた。医療者としてはただ業務が多いだけでなく、自らの専門外のことまで対応せねばならないこともあるそうで、対策の必要性を感じた。
- B 終末期患者の代理意思決定における心的苦痛をどのように軽減できるかということを考えさせられた。一方で、看護をする方、看取りをする方への心理支援、グリーフケアについて、まだ十分な心理支援が確立されてない実態を目の当たりにし、まだ研究の余地があるように感じた。
- C 本吉病院の齋藤先生が「病院の役割分担が必要」と話されていたことが印象に残った。高度な医療の提供がメインになっている病院が多く、今後の超高齢社会において特に必要な地域密着型の病院が乏しい現状に危機感を感じた。

来年度以降の改善点

- A 急性期病院という側面と地域医療という側面、また被災地という側面が混在していた。どれも多くの場合受け身での研修となってしまう、深掘はできなかった。受け入れ側の負担の分散は必要だが、一か所に腰を据えてもいいのかもしれない。
- B 病院研修の性質上、独居世帯など、十分に医療を受けられない方々に触れることができなかった。高齢化の進んでいる地域ということもあり、こういった地域の特色、問題についてもっと深掘出来るように思う。
- C 気仙沼病院は急性期病院なため、高度な医療の提供が主であり、高齢社会において必要とされている回復期・慢性期をメインに担う病院ではなかった。訪問診療を行う病院や回復期を担う病院を見た方が、今後増えてくる独居かつ高齢の方への医療に必要な要素を見つけられると思った。

授業の限界

- A 講義・見学ベースだったため、実習らしさがなかった。唯一訪問診療だけは医療者の声と患者・家族の声を聞くことができた。コロナ禍の実習のため制限があり仕方がないのかもしれない。
- B 手術、透析見学をしたが、当日は手術の予定が少なく、1件のみの見学となった。見学させていただいただけでもありがたいが、いい経験だった分、あまり見学できなかったのがもったいなかった。
- C 気仙沼は、東日本大震災の被災地域であることに加え、特に高齢化が進行している地域でもある。そのため、「震災をふまえた医療」と「高齢社会に対応する医療」という2種類の内容が研修で同時に展開されており、内容を深く掘り下げにくかった。

まとめ

被災地および高齢化の進行が著しい気仙沼で、地域に寄り添う医療のあり方を学んだ。

気仙沼市立病院では、地域でも十分な急性期対応が行える設備をもつ一方で、病院のスタッフ数が十分でなく、専門外の業務をこなす必要があるという現状を知ることができた。また、本吉病院の訪問診療では、患者を支える家族のグリーフケアが求められていることを知った。その他、高齢患者に多い疾患や地域医療特有の課題を解決する必要性を強く感じた。

総じて本研修は、これから到来する超高齢社会の医療に求められている要素を各々が考える良いきっかけになった。